

盛岡市遺跡の学び館 第13回企画展

「陸と海の“大洞式土器”－盛岡の縄文時代晩期とその周辺－」

【平成27年10月10日～平成28年1月17日】

資 料 集

おおほら
大船渡市大洞貝塚

昭和31年発掘調査出土遺物図録

(盛岡市遺跡の学び館所蔵資料)



例 言

1. 本資料集は、岩手県盛岡市遺跡の学び館第13回企画展「陸と海の“大洞式土器”―盛岡の縄文時代晩期とその周辺―」(2015年10月10日～2016年1月17日)において展示を行った、岩手県大船渡市大洞貝塚の昭和31年(1956)調査出土遺物の写真及び拓本を掲載した図録である。
2. 本資料集に掲載した遺物は現在、盛岡市遺跡の学び館所蔵となっているが、平成16年(2004)の開館以前は、盛岡市中央公民館(旧盛岡市公民館)に所蔵されていたものである。
3. 大洞貝塚の昭和31年調査は、慶應義塾大学教授であった江坂輝弥氏^{えさかてるや}が主催したもので、主にA[′]地点を対象に、大学の考古学研究室学生と、盛岡市公民館職員であった吉田義昭氏^{よしあき}(日本考古学協会員、盛岡市文化財保護審議会委員)、県立盛高等学校教諭であった東登氏^{あづまのぼる}と郷土研究班生徒らが参加して実施された。調査後、出土遺物の多くが当時の盛岡市公民館に収蔵され、一部資料が展示公開された。調査に係る詳細は、転載した当時の関連文献を参照されたい。
4. 遺物の資料化・写真撮影は、遺跡の学び館 神原雄一郎が行った。
5. 資料集の編集は、遺跡の学び館 津嶋知弘が行った。
6. 時間軸を示す土器型式名は、下記の呼称を使用した。
 - 縄文時代後期末:宮城県宮戸島台^{みやと だいがい}貝塚の出土土器を標準資料とする「宮戸Ⅲb式」(小井川 1980)
 - 縄文時代晩期:山内清男^{やまのうちのしるお}が、大正14年(1925)の大洞貝塚A地点・A[′]地点・B地点・C地点発掘調査出土土器と秋田県藤枝遺跡・青森県是川遺跡出土土器を標準資料にして模式図を示し設定した、「大洞B式」^{おおほら}「大洞BC式」「大洞C1式」「大洞C2式」「大洞A式」「大洞A[′]式」(山内 1930)
 - 弥生時代前期:本州最北の水田跡が発見された青森県砂沢遺跡^{すなざわ}の出土土器を標準資料とする「砂沢式」(芹沢 1960, 須藤 1990, 弘前市教委 1991, 高瀬 2004, 石川ほか 2005)
 - 弥生中期前葉:一関市谷起島遺跡^{やぎしま}の出土土器を標準資料とする「谷起島式」(鳥畑 1955, 石川ほか 2005)
7. 巻末に参考資料として、すでに複数の研究者の論文等により公表されている大正14年(1925)調査出土土器(東京大学総合研究博物館所蔵)の実測図・拓本を再構成して掲載した。

【引用文献】

- 石川日出志ほか 2005 『関東・東北弥生土器と北海道縄文土器の広域編年(課題番号 14310189) 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書』明治大学文学部考古学研究室
- 小井川和夫 1980 「宮戸島台貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」『宮城史学』7
- 須藤隆 1990 「東北地方における弥生文化」『伊藤信雄先生追悼 考古学古代史論攷』
- 須藤隆 1992 「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 須藤隆ほか 2007 『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性(課題番号 17520515) 平成17～18年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)研究成果報告書』東北大学大学院文学研究科
- 芹沢長介 1960 『石器時代の日本』
- 高瀬克範 2004 『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
- 鳥畑寿夫 1955 「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25
- 弘前市教育委員会 1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書』
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3

目 次

【写真図版】

写真図版1 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(1).....	1
写真図版2 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(2).....	2
写真図版3 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(3).....	3
写真図版4 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(4).....	4
写真図版5 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(5).....	5
写真図版6 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(6).....	6
写真図版7 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(7).....	7

【拓本図版】

第1図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(1).....	9
第2図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(2).....	10
第3図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(3).....	11
第4図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(4).....	12
第5図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(5).....	13
第6図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A [〃] 地点調査出土遺物(6).....	14

【関連文献】

■昭和31年(1956) 吉田義昭「大船渡市大洞貝塚の發掘」『奥羽史談』第6巻 第4號.....	15
■昭和36年(1961) 江坂輝弥「岩手県大船渡市大洞貝塚」『日本考古学年報 9 昭和31年度』 日本考古学協会編纂	16
■昭和31年(1956) 江坂輝彌『大洞貝塚』大船渡市教育委員会 社教シリーズ第7集.....	17

【参考資料】

●大船渡市大洞貝塚 大正14年(1925)調査(長谷部言人・山内清男)出土土器.....	31
--	----



大船渡市大洞貝塚位置図(国土地理院ホームページ地理院地図に加筆)



平成 27 年(2015)の大洞貝塚周辺(グーグルアースに加筆)

001

台付浅鉢形土器【大洞 BC 式】



002

鉢形土器【大洞 BC 式】



003

浅鉢形土器【大洞 C1 式】



写真図版1 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(1)【001~003】



004

皿形土器【大洞 C1式】



005

鉢形土器【大洞 C2式】



006

壺形土器【大洞 C2式】

写真図版2 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(2)【004～006】

007
注口土器【大洞 C2 式】



008
壺形土器【大洞 A 式】



写真図版3 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(3)【007・008】



009
深鉢形土器【大洞 A 式】



010
壺【砂沢式】

写真図版4 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(4)【009・010】



骨角器，貝輪，魚骨【縄文晩期】

写真図版5 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(5)



鉢形土器破片【大洞 BC 式】



皿形土器破片【大洞 C1 式】



壺形土器破片【大洞 C1 式】



鉢形土器破片【大洞 C2 式】

写真図版6 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(6)

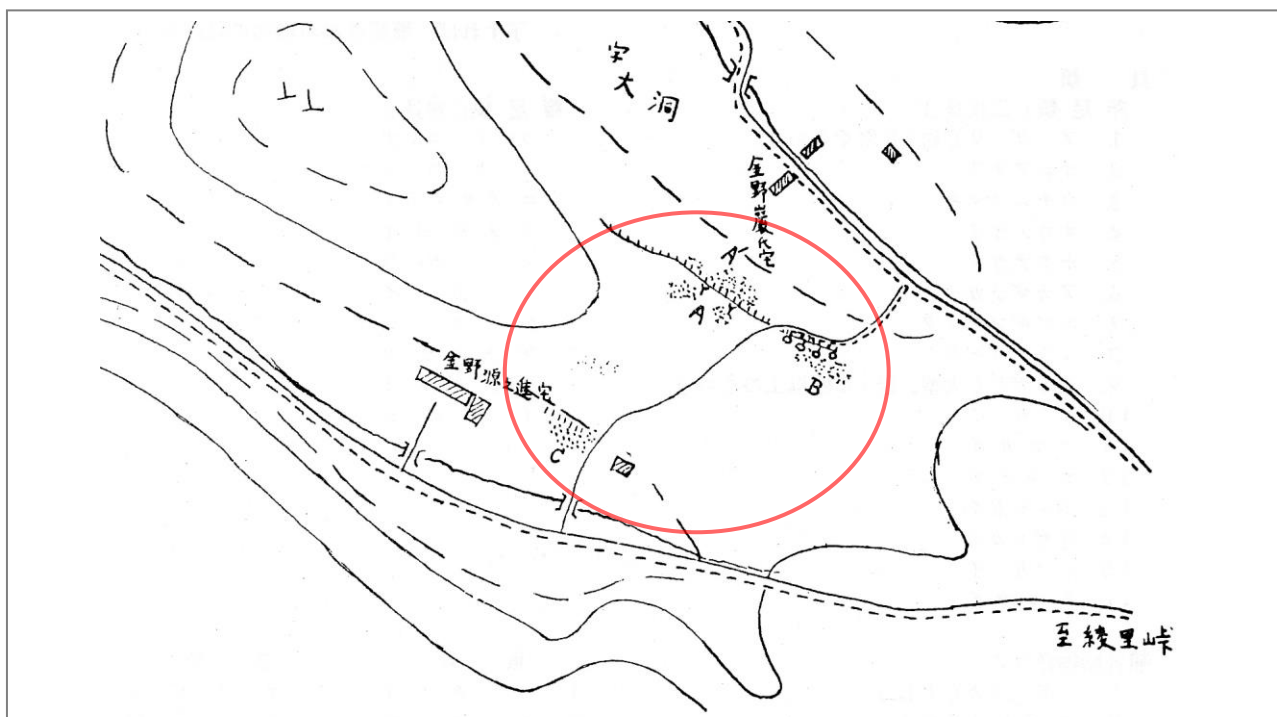
鉢形土器・壺形土器破片
【大洞 C2 式】



鉢形土器・深鉢形土器・高坏破片
【大洞 A' 式・砂沢式】



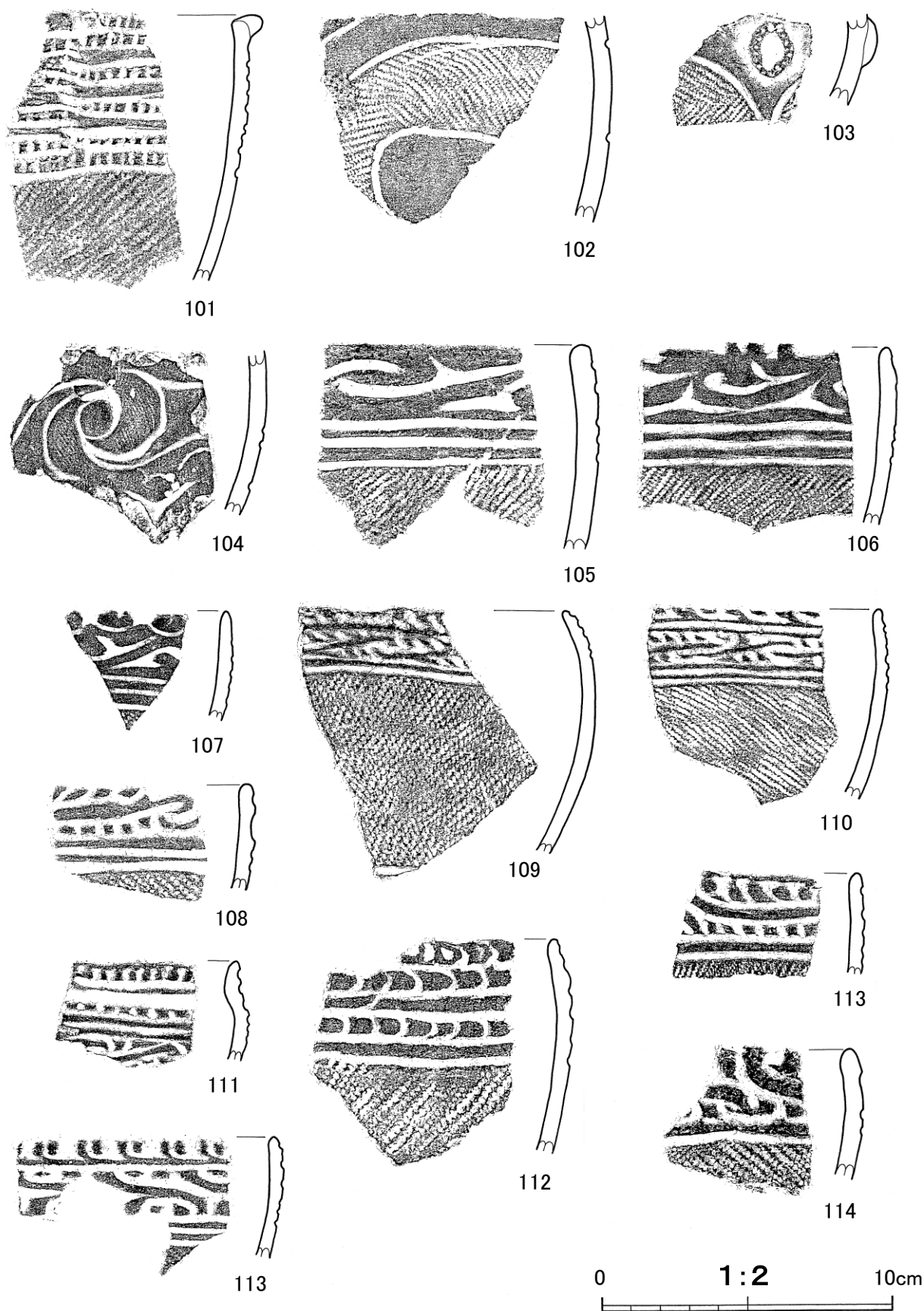
写真図版7 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土遺物(7)



昭和 31 年(1956)当時の大洞貝塚各地点の位置図(江坂 1956 より)

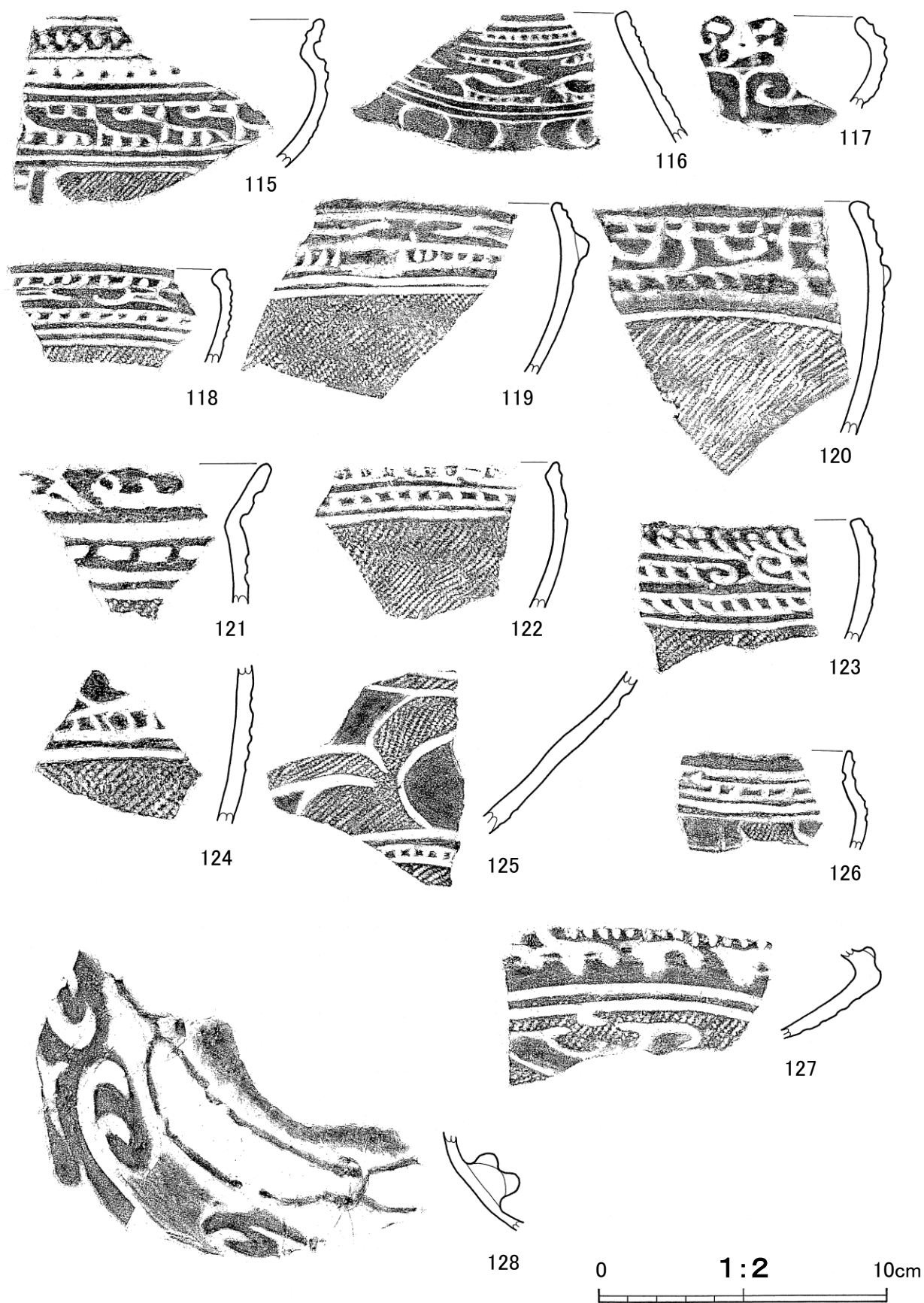


昭和 52 年(1977)11 月の大洞貝塚周辺(国土地理院ホームページ地理院地図空中写真に加筆)



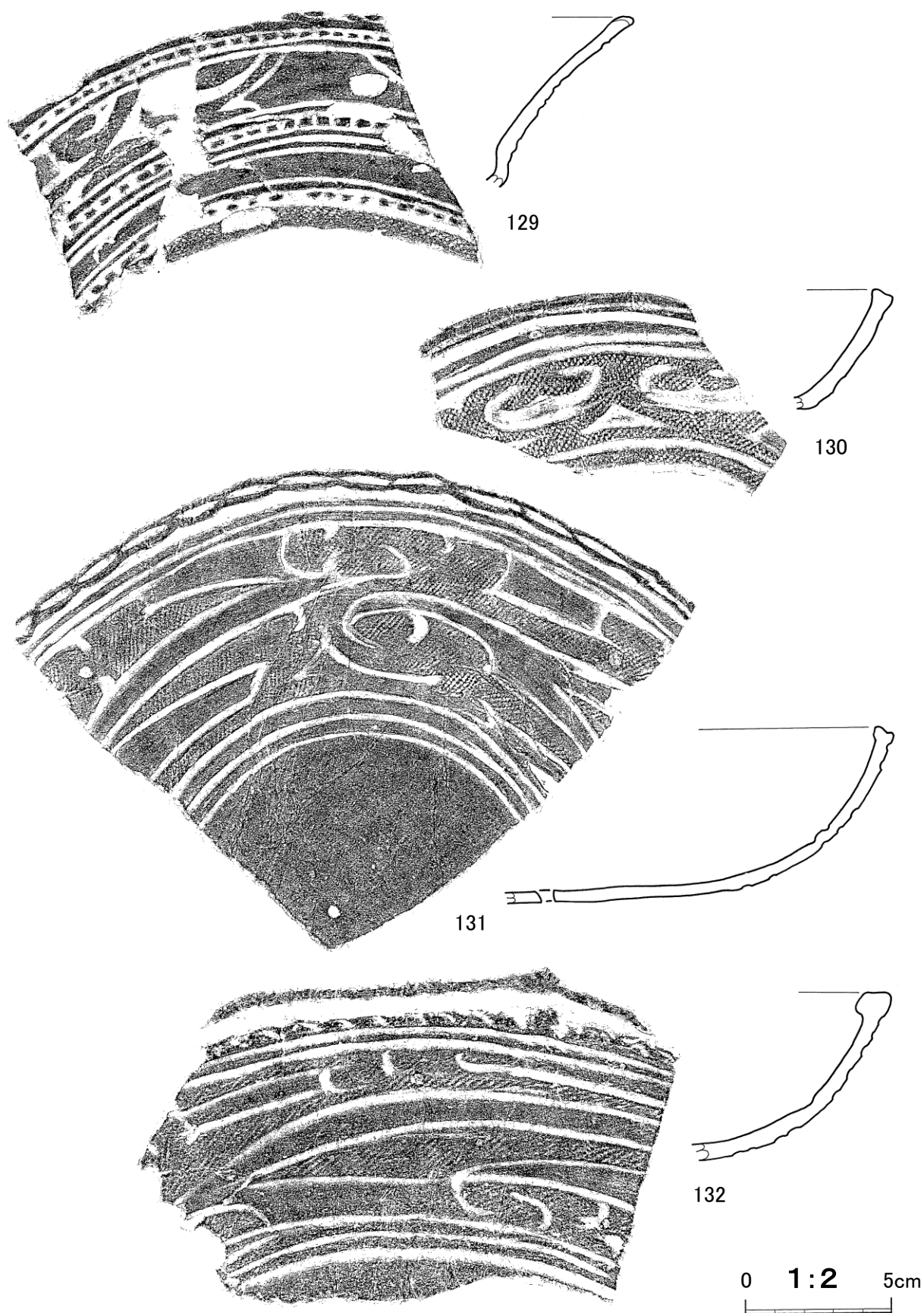
【001-003:宮戸Ⅲb式, 004-007:大洞B式, 008-014 大洞BC式】

第1図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A'地点調査出土土器(1)【101~114】



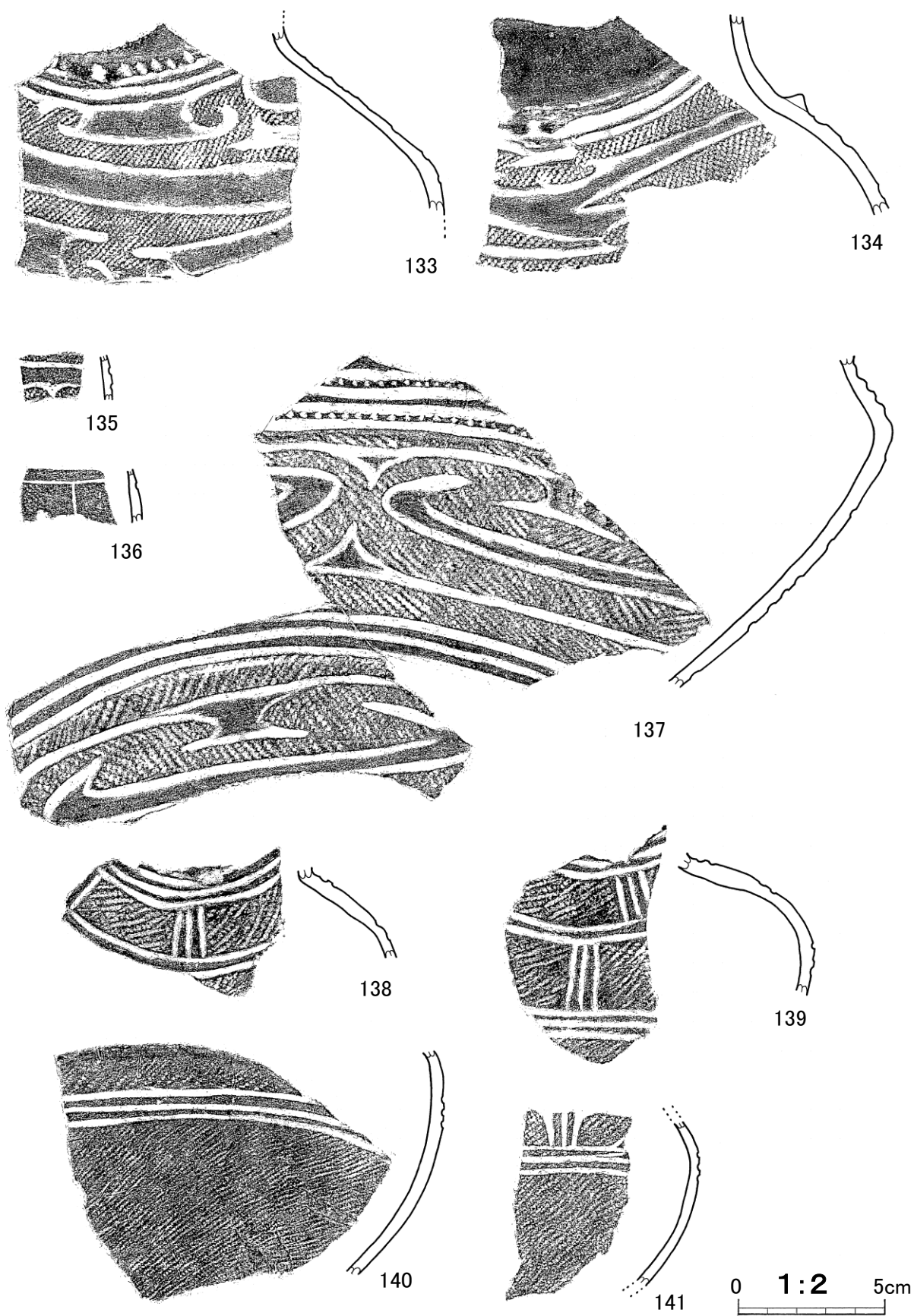
【115-125:大洞 BC 式, 126-128 大洞 C1式】

第2図 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土土器(2)【115~128】



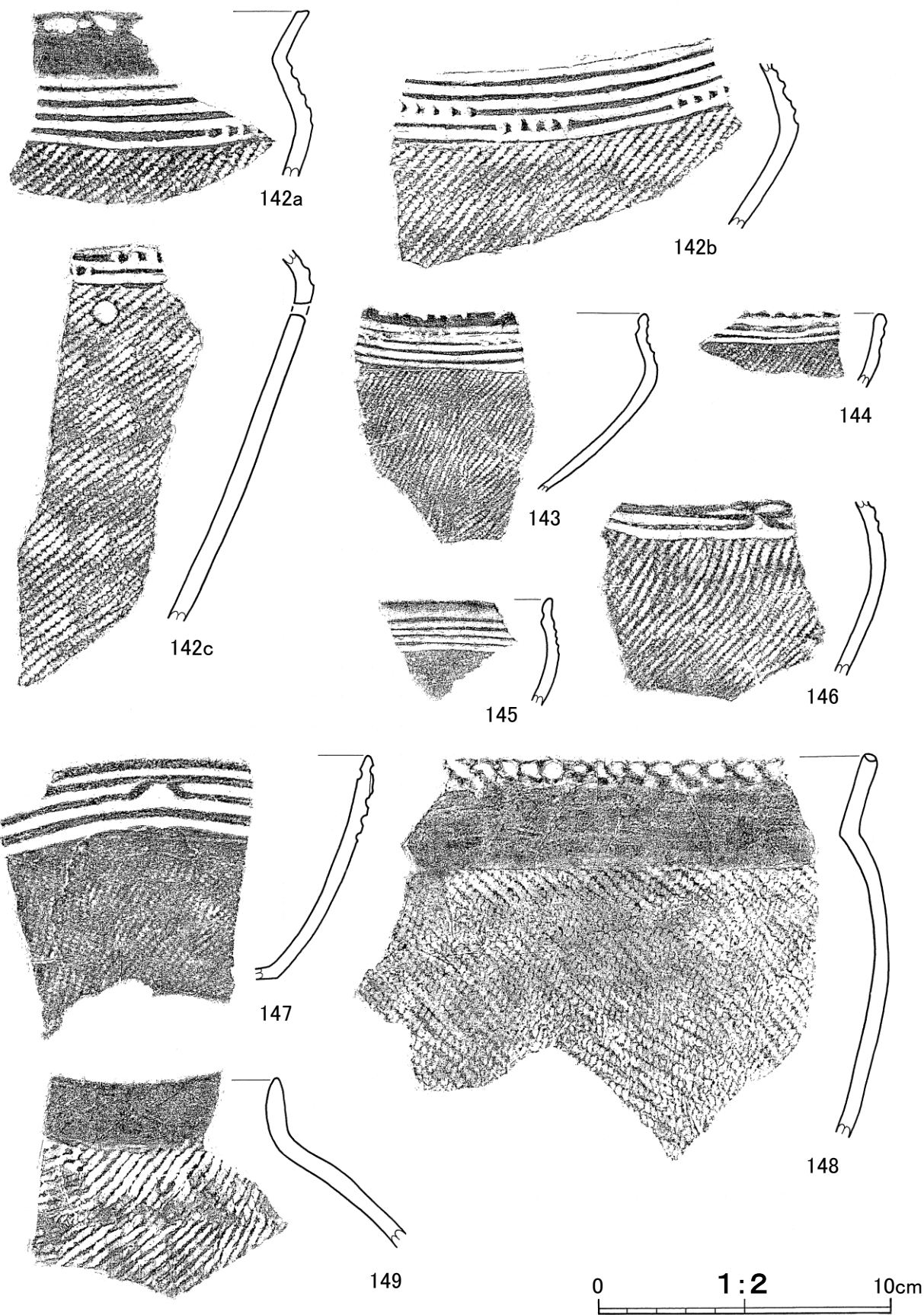
【129-132:大洞 C1式】

第3図 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土土器(3)【129~132】



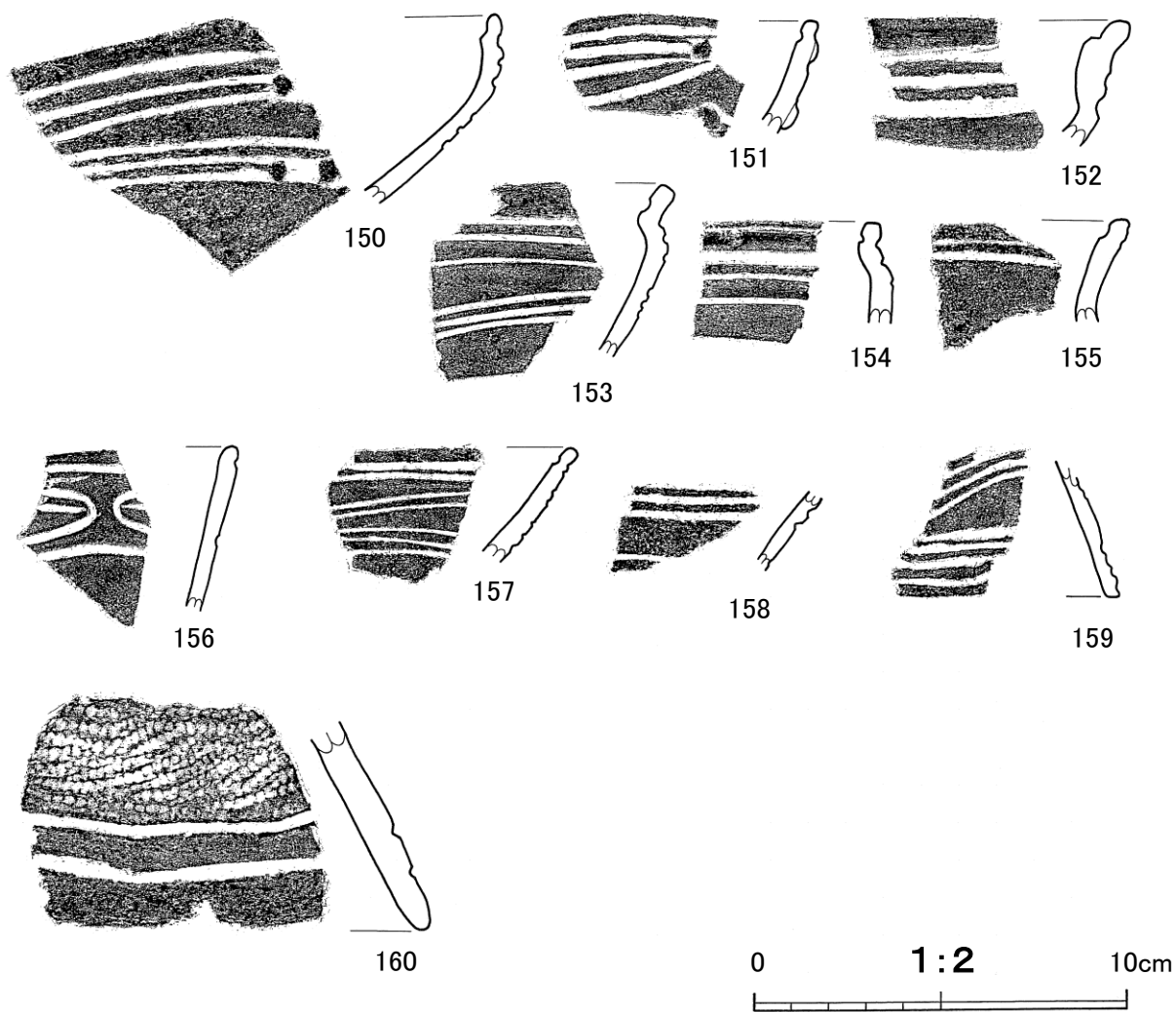
【133-134:大洞 C1式, 135-141 大洞 C2式】

第4図 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A'地点調査出土土器(4)【133~141】



【142-144:大洞 C1式, 145・146・149 大洞 A 式, 147-148 大洞 A' 式】

第5図 大船渡市大洞貝塚 昭和 31 年(1956)A' 地点調査出土土器(5)【142~149】



【150-155:砂沢式, 156-160:谷起島式】

第6図 大船渡市大洞貝塚 昭和31年(1956)A'地点調査出土土器(6)【150~160】

大船渡市大洞貝塚の發掘

吉 田 義 昭

四月七日から一四日迄慶大考古学研究室江坂輝彌氏により大船渡市赤崎大洞貝塚の發掘調査が行なわれた。

内三日間、吉田も江坂氏の好意により親しく調査に参加するを得た。その結果をこゝに簡単に紹介する。

一行は氏及び同研究室学生三名で、大正一四年この貝塚は山内清男氏や長谷部言人博士等それに故小田島祿郎氏も参加して大規模な調査が行なわれた事があり、この貝塚の出土々器は山内氏により、陸前地方縄文式文化晩期の模式名大洞B・BC・C₁・C₂・A・A¹式をその出土地点に因み命名された代表的晩期貝塚である。

今回の發掘地点は主としてA¹地点、それに小規模にA地点と二箇所を選定、A¹地区で約一二坪。この場所は二層の貝層よりなり表土近くからA¹式、第一貝層からはC₁及び僅かにBC式を混じ、第二貝層(厚約三〇糎)はC₁・BC式、最下部には後期土器若干を認めた。

出土遺物は土器・石鏃・石匙・石斧・石劍・角器(銚・鏃・鉤針・七・裝飾品・針類)等で骨角器は極めて豊富であつた。

自然遺物、貝類ではアサリが全体の約七八〇%程度を占め、その他多いものにはホタテガイ・アカガイ・ウバガイ・オニアサリ等があり、江坂氏により約二六種が検出された。又哺乳動物骨骼にはシカ類が非常に豊富で其他イノシシ・イヌ・サル・アナグマ・タヌキ・クジラ・イルカ、就中第四区からは一体のイヌが埋葬された状態で発見された。鳥類では、ヤマドリ・カモ類をはじめ種類不明のものも大部ある。

○

今度の調査目的は奥羽地方太平洋岸の縄文文化時代の漁具の変遷並びに外洋・内湾・陸水地域での漁具の対称等の研究の一環として行なわれたもので、今後とも同地方貝塚の調査が続けて行なわれる筈である。

尙發掘には県立盛等学高校郷土研究班(担任東登先生)が参加協力した。

岩手県大船渡市大洞貝塚

所在地 岩手県(陸前国)大船渡市赤崎町中赤崎字
大洞136畑.

調査期日 4月7日~14日.

調査者 慶応義塾大学文学部考古学研究室・江坂
輝弥(調査責任者), 可児弘明, 山口正道, 横倉
友治, 吉田義昭, 東登

調査概要 今回の調査で発掘調査を実施した地区は
長谷部博士などによってA地区, A'地区と名付けら
れた場所で, 主として崖下のA'地区の貝層の所在部
分を中心として発掘, 崖上のA地区には一部小試掘壕
を設けた程度である.

A'地区には崖に沿って東南から西北へ長さ18m,
幅2mの第1'トレンチを発掘, さらにその両翼の一部
を拡張発掘した.

本調査は江坂が本貝塚において大洞B, BC, C₁, C₂,
A, A'各形式の土器に伴在する骨角器, とくにその中
の漁具がどのような時代的変遷を示すかを調査したい
と考え実施したものであるが, その結果大洞B式直前
の後期末形式より, 大洞B, BC, C₁, C₂式の各形式
の土器に伴う釣針, 銚などの骨角器の変遷の大略を把
握することができた. しかしいまだ資料の点でも充分
とは思えないので, これらを確認のため, なお数回の
調査を続けたいと考えている.

詳細な報告は調査の完了を待って公刊の予定であ
る. 概要は日本考古学協会第17回総会の折に研究発表

がおこなわれている¹⁾.

(江坂 輝弥)

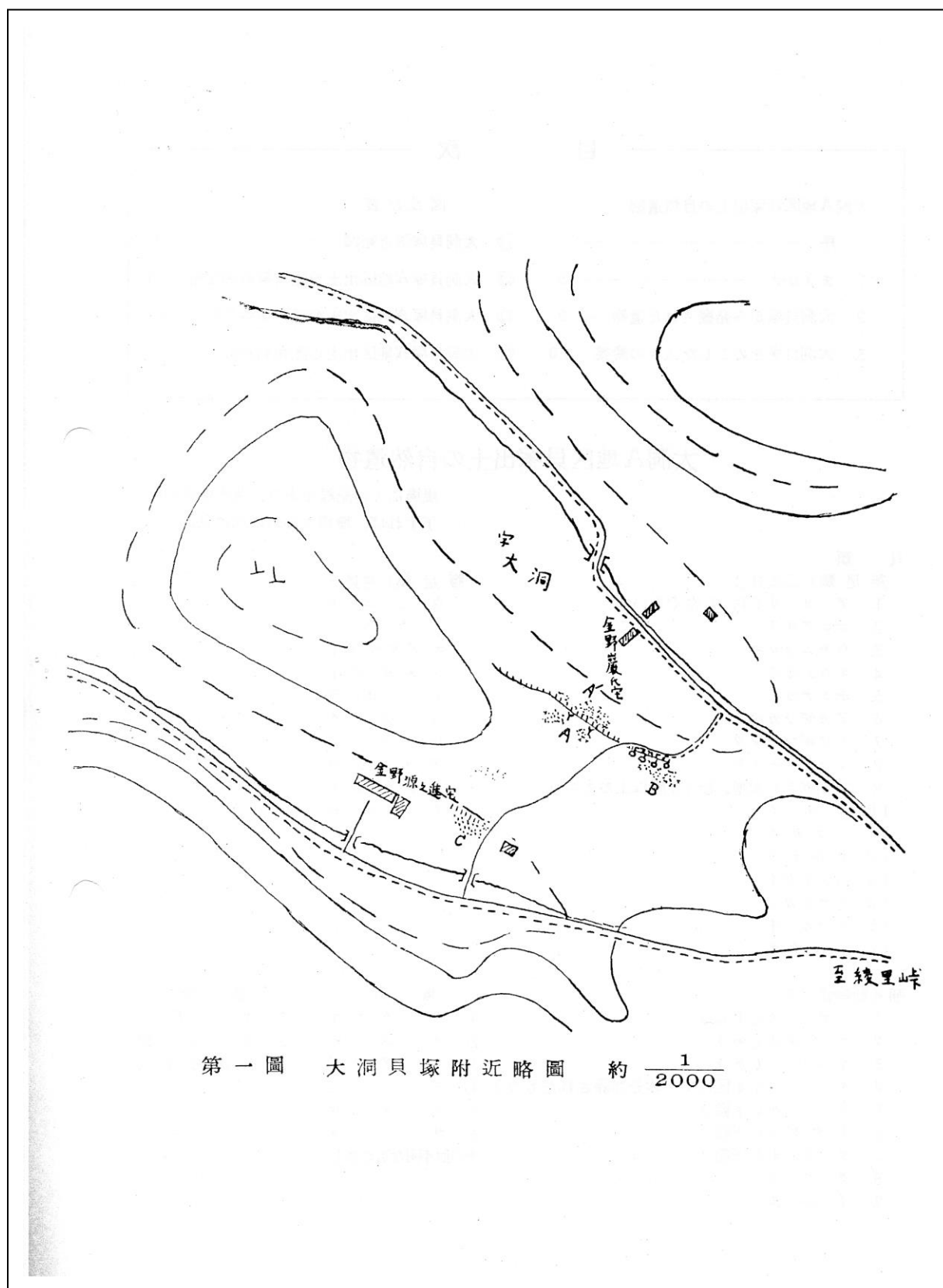
社教シリーズ第7集

慶応義塾大学考古学研究室

江坂輝彌著

大洞貝塚

大船渡市教育委員会



目 次

大洞A地区貝塚出土の自然遺物

図及び表

序	◎ 大洞貝塚附近略図	1
1. まえがき	◎ 大洞貝塚A地区出土の鹿角製の固定銚	11
2. 大洞貝塚から発掘された遺物	◎ 大洞貝塚A地区出土の鹿角製離れ銚	11
3. 大洞貝塚をのこした人々の漁業	◎ 大洞貝塚A地区出土の鹿角製釣針	11

大洞A地区貝塚出土の自然遺物

現場にての記録であり、遺物整理が完了すれば、種類はなお増加の見込み

貝 類

斧 足 類〔二枚貝〕

1. ア サ リ (約70%ぐらい)
2. オニアサリ
3. ウチムラサキ
4. オウノガイ
5. ホタテガイ
6. アカザラガイ
7. エゾギンチャク
8. シラトリモドキ
9. アカガイ (大型、径10㎝以上のもの)
10. マ ガ イ
11. マ テ ガ イ
12. サ ル ボ ウ
13. ホ ッ キ ガ イ
14. カ ガ ミ ガ イ
15. イ ガ イ
16. ミ ル ク イ

腹 足 類〔巻貝〕

- ウ ミ ニ ナ
- ア カ ニ シ
- エ ゾ タ マ ガ イ
- ツ メ タ ガ イ
- エ ゾ ボ ラ
- ス ガ イ
- レ イ シ
- ア ラ ム シ ロ
- イ シ ダ タ ミ
- イ ボ ニ シ

哺乳動物骨カク

1. ニボンジカ (少し)
2. エゾジカ (多)
3. イノシシ (多)
4. イ ヌ (4区にて一体分埋葬されたもの)
5. サ ル (下顎)
6. ア ナ グ マ (下顎)
7. タ ヌ キ (下顎)
8. ク ジ ラ
9. イ ル カ

魚 骨

1. マ ダ イ
 2. ス ズ キ
 3. マ ア ジ
 4. フ グ
 5. マ グ ロ
 6. サ メ
- その他不明なもの多し

鳥 骨

1. ヤ マ ド リ
2. カ モ 類
3. 其 他 種 不 明

序

江坂輝彌先生は、昨年8月早稲田大学の西村正衛先生と共に、猪川町長谷堂貝塚の発掘に来られ、貴重な文献を多数物にせられたのである。本年度又慶大考古学研究室を動員して来られ、赤崎町の大洞貝塚の研究に着手されたのである。その際大洞貝塚は考古学上重要な位置を占めているので、市民一般にも充分認識してもらう必要から、紹介を依頼したところ、心よく御承諾下され、早速この原稿が届けられたのである。従ってこの原稿は第6集、「気仙地方先史時代の遺跡」につぐもので、学問上重要な意義をもつものである。御多忙中特に本市によせられた御厚意に対し、深く感謝を捧げたい。

大洞貝塚は大正14年、東大東北大の小金井良精博士、大山柏公爵、長谷部言人博士、池上啓介博士、八幡一郎先生、山内清男先生等、斯界の最高権威者によって調査され、国内は勿論外国等にも紹介され、大洞の名は広く知られるようになった。今回の江坂先生等の計画はこれに次ぐものといわれ、これ等の資料によって、現在までの縄文文化晩期の編年的細分を完成されるのではないかと絶大なる期待をもたれている。

第7集は、こうした意味に於て極めて重要な意義をもつと共に「社教シリーズ」の声価を一層高めることが出来たので、ここに繰返し江坂先生に感謝を捧げたい。

昭和31年6月

大船渡市教育長 大和田 肇

大船渡市赤崎町大洞貝塚について

慶応義塾大学文学部 江 坂 輝 彌
考古学研究室

1、ま え が き

大洞貝塚は中赤崎から綾里峠を越えて綾里村野方に向う道路に沿って、大船渡湾外から東へ入った2つに岐れた谷に挟まれた小高い丘の南北両斜面にあり、峠に向う道路は南の谷に沿って峠へ向っている。貝塚のある小高い丘の両側の低地には農家が点在している。そしてこの附近は小字大洞と呼ばれている。

大洞貝塚は考古学研究上に重要な貝塚で、考古学を少し学んだものでも大洞貝塚の名を知っているはずである。また最近刊行された日本考古学の概説書を見れば縄文文化のところにかならず大洞貝塚の名称を見出すことが出来る。そればかりでなく戦後日本の縄文文化を紹介した欧米人の欧文の著書の中にも Shell-Mounds OBORA及びOBORA, B type, B-C type, C₁type, C₂type A type, A type などの形式名まで紹介されているものが2、3に止らないほどある。

大正14年本貝塚を調査された長谷部言人博士と山内清男氏がおおぼらと呼ばれたため、考古学者はおおぼらと読まずおおぼらであると思っているため、多くの著書に仮名又ローマ字で書く場合おおぼらOBORAとなっている。

大洞貝塚は何故このように有名なのだろうか。それは縄文文化の研究は昭和の時代になって急速に進歩をなし、縄文文化の時代の長さは、縄文文化が終って弥生文化から今日に至るまでの二千年余に及ぶと思われる非常に長い時間の2倍以上の長さであることが判明し、この非常に長い期間栄えた縄文文化の各時期の土器、石器、骨角器は時代の流れと共に変化し、各時代毎にいろいろな異った特徴のあることがわかり、先ず縄文式土器の各時代の文様器形の変化が注目され、貝塚の貝層の上部から発掘されたものと、下部から発掘されたものと、器形、文様などの特徴が全く異なるものであれば、上部から発掘された形式の土器は、下部から発掘された土器形式より新しいと云うように、相対的な年代のきめかたで、層位的に縄文式土器の文様、器形の変遷が研究されていった。

この研究を本格的に推進されていった考古学者は大正12、3、4年に、東京帝国大学理学部人類学科撰科を修了された山内清男氏（現東京大学理学部講師）八幡一郎氏（現東京大学文学部講師）甲野勇氏（都立武蔵野郷土館長）などの当時の新進考古学者で、山内氏は卒業後、東北帝国大学医学部解剖学教室に助手として勤務され、長谷部言人博士と共に、主として仙台平野を中心に奥羽地方の縄文文化の編年の研究に努力され、八幡氏は東大人類学教室にのこられ郷里の長野県及び関東平野を中心に研究を進められ、甲野氏は大山柏公爵の主催される大山史前学研究所員として、公爵と共に関東平野各地型の貝塚を計画的に、系統的に小発掘調査を続行し、関東地方の縄文文化の変遷に対する研究では昭和2、3年頃より6年頃に亘って最も華やかに活動された方である。

大洞貝塚はこの縄文式土器の編年の研究の旗頭である山内氏が、大正14年4月、岩手県史蹟名勝天然記念物調査委員であった故小田島祿郎氏の案内で、先ず南斜面のC地区貝塚の一部と北斜面西側の

崖下の畑にあるA地区と名付けた貝塚の周辺部を発掘、続いて同年8月23日から9月1日まで、長谷部博士はC地区、B地区、A地区、A'地区の順で、それぞれの貝塚の一部を発掘調査され、C地区とB地区では長谷部博士が発掘の主目的であった縄文文化人の人骨も数体発掘された。又陸前高田市矢作町梅ノ木、女神洞窟、同市気仙町長部貝塚などを調査された小金井良精博士（日本石器時代人即ちアイヌ論で世界的に著名な人類学者、長谷部博士の恩師で東京帝国大学医学部名誉教授であった）大山柏公爵、池上啓介、八幡一郎氏なども8月27日には大洞貝塚に到着、27、8日の2日間B地区貝塚の一部を発掘、成人骨三体、幼児骨骸2体分などを発掘されている。

このように大正14年には県の小田島祿郎氏の案内にて、東京、仙台の著名な学者が大洞貝塚を発掘調査しており、この貝塚から発掘された縄文文化末期の土器を作った人々の骨骸も10体を越す数発掘され、末崎町細浦貝塚で発掘された人骨などと共に、長谷部博士が恩師小金井博士の縄文文化人即ちアイヌ説を一步進めて、汎アイヌ説を打ち立てられるための貴重な材量となったものと考えられこれだけからしても大洞貝塚が学界著明な貝塚となり、日本考古学研究史の上に記録されるべき価値充分なるものであるが、実はその上に、この貝塚各地区出土の土器が奥羽地方の縄文文化晩期の各時期の代表形式となり、山内氏によって、大洞B式、大洞BC式、大洞C₁式、大洞C₂式、大洞A式、大洞A'式と命名され、6つの時代区分の標準資料出土遺跡となっている。

山内氏は縄文文化を大きく早期、前期、中期、後期、晩期と5区分され、奥羽地方の晩期は長谷部博士と山内氏が大正14年に大洞貝塚の各地区で発掘された資料を中心として、前記した如く6つの時代に区分されたのである。即ち大洞貝塚B地区で多量に出土のもの最も古くC地区出土の古形式との間に、BよりC₁への移り変りの時期としてB～C式があり、この土器形式は両氏の大洞貝塚発掘資料には極めて少なかったが、青森県は川遺跡（現在八戸市）や秋田県鷹巣町藤株遺跡で喜田貞吉博士発掘資料などに、該当資料多くBC式が設定された。又C式はC₁とC₂式の2つの時代に区分されることもわかり、A式はA地区西側貝塚の西はずれ附近出土の土器に多く、A'式はA地区東側貝塚西北部の貝塚周辺部の表土下数10厘のところからかなりの量出土した模様である。

即ち山内氏によって奥羽地方南半の縄文文化晩期各期の標準遺跡として、それぞれの地区出土の土器に大洞B、BC、C₁、C₂、A、A'式と命名されたことが大洞の地名を広く学界に知らしめた主因であろう。

大洞貝塚発掘の土器を標準資料として、大洞式なる名称を先ず学界に最初に報告されたのは長谷部博士であった。博士は大正14年9月大洞貝塚の発掘調査を終って、仙台に帰られると早速『陸前大洞貝塚発掘所見』と題する8月下旬の調査結果をまとめた報文を執筆され、大正14年10月発行の人類学雑誌40巻10号に掲載された。この報文の最初に『貝塚は丘陵鞍部の南北両斜面に在り、北なるは更に東西に分る。此中最大なるは西の貝塚にしてママ（傾斜地につくった境崖などを云う方言）の上下に亘り、少なくとも3類の土器を併せ出し、東なるは概ね其2、南なるは主として只其1類を出し各々相連ることなしと雖、文化層の通ずるものあれば併せて大洞貝塚と称へ、西をA、A'、東をB、南をC地点と記号して区別すべし』と記されており、大洞貝塚のA'地区、A地区、B地区、C地区の名称は長谷部博士によって名付けられ、博士によって右の如くその地区が明示されている。さらに博士は〔C地点〕C地点土器は僅に数片を除いて全く同1類に属し、其製作に精粗2様あり…中

略…此精巧なるものの類は亀ヶ岡或は奥羽薄手式などと称せらるるものに属するも、此等の称呼は抑も実の公明ならざるものである。故に余等はC地点の土器を大洞C式土器と名付け、追って山内君が詳記する筈である』と記され、B地区の記載では『B地点(大洞東貝塚)、27、28両日発掘せる区域の土器は滑沢薄手なるものもあるが、大洞C式とは異り、又口縁に襷形突起の著大なるや、柄形突起を有するものをも交へ、全配合が山内君の細浦貝塚上層より採集せる土器に酷似している。二百数十片中大洞C式に似たるは只23片を交へ、他は殆総て細浦のに類せるを確めた』と記されているが、この細浦貝塚上層の土器に酷似すると云うが、後に山内氏によって大洞B式土器と名付けられたものである。又A'地区の記載では『A'地点(大洞西貝塚)135番地、吉田兼治氏方所有畑地で貝の散布せる区域甚だ広く』4月山内君が小田島氏と共に掘ったところはママよりも10間ばかり下手だったそうである。余の掘った所はAと同じく殆貝なく黒褐色の土に交りて夥しき量の土器現はれた。…中略…此A'発掘地点の土器はすべて光沢ある晴褐色を呈し、大洞C式に比して襷形突起尚著しく、口縁に数条の横サワ線を陰刻せるは彼に似て、而も刺痕を加へざるを異りとし、所謂亀ヶ岡式或は奥羽薄手式中明かに区別し得べき一型をなすものである…中略…此特殊なる形式の殆純集積をなせるに遭遇せるは興味深きことである。即ち此種土器のみを出す代表的遺跡を明かにするまで、仮に大洞A式土器と名づけて区別したいと思ふ』と記されているが、これも後に山内氏によって、ママの下で山内氏などの発掘土器とママの上の畑、A地区で長谷部博士の発掘された土器との間に類似点があると共に、文様などの細部に差異があり、後に後者から前者へと進展したものであることもわかり、大洞A式、A'式の2形式に細分された。

山内氏は昭和5年5月発行の考古学1巻3号に『所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末』と題する論文を発表されたが、その中で『大正14年長谷部博士(8月)及び余(4月)は陸前気仙郡赤崎村大洞貝塚を発掘して、所謂亀ヶ岡式土器を多量採集することを得た。同博士はこの貝塚の土器について予報を寄せられ、所謂亀ヶ岡式と云う名称は公明なものでなく、大洞C式と同A式等の細別あることを指摘せられた。

吾人はこの材料を精査して、約6つの型式が所謂亀ヶ岡式土器を含むことを知った大洞B式、未命名の1形式(著者註、後に山内氏が大洞BC式とされたもの)大洞C旧型式(後に大洞C₁式とされた)大洞C新型式(後に大洞C₂とされた)大洞A式、大洞A'式がこれである。夫々大洞貝塚B、C、A、A'地点採集土器の主要なものである。未命名の1型式(大洞B~C式)はこの材料には僅少であるが(著者註、大洞貝塚の発掘資料には、この形式の土器は僅かよりなかった)他の材料(陸奥是川村中居遺跡の泥炭層ある1地点、山本氏発掘奥羽史料調査部蔵羽後藤株遺跡出土)を参照して1型式と制定されるものである。

「各型式は夫々年代を異にするものであって、層位及び型式の比較によって、上記即ち大洞B式からA式に至る順序に相繼ぐものであることがわかった」と記されている。

以上が大洞貝塚の研究史であり、それまで亀ヶ岡式土器、或は奥羽薄手式、陸奥式土器などと一括して呼ばれて来た奥羽地方の末期(晩期)の縄紋式土器を大洞貝塚の調査によってその器形、文様の変化から6つの時代に区分することができ奥羽地方の縄文文化晩期の編年の細分を一応本貝塚の発掘資料によって完成したわけである。

以上記したことによって大洞貝塚が考古学研究上に重要な役割をなした遺跡で、著名な貝塚であることを理解していただけたことと思う。

2、大洞貝塚から発掘された遺物

大洞貝塚からは縄文文化晩期の時代の各種の遺物が発掘されている。前記した如く晩期の土器は大洞B、BC、C₁、C₂、A、A'式の各式の土器が出土し、完形のものもいくつか発掘されており、復原すれば完形になるものまで数えると今日までにかなりの数の土器が出土していると思われる。著者が今春4月7日から14日までの間の5日間（2日降雨のため休止）のA'地区の発掘調査でも略完形の大洞B式及びC₁式の小型土器各1個と復原すれば略完形になる大洞B式1個とC₁式5個が発掘されている。

土器の外には磨製石斧、打製の土掘り具、石ヤジリ、石キリ、石ナイフ、玉類など石製の利器と装身具、及び石皿、磨石の如く臼と杵の如き用途に使われた石製の什器類、鹿の角で製作した釣針、固定銚、離れ銚などの鹿角製漁具類同じ鹿の角で作った頭髮飾りに使ったと思われるヘアーピンの類、猪の牙で製作した牙製のヤジリ、牙製の腕輪、鹿の指骨に孔を穿った垂飾類、鹿、猪の4肢骨を割って、磨いて製作した漁網の綱などに、他の綱をからませる時に使うスパイキーなどと呼ばれる道具に似た漁具と思われるものなど、鹿や猪の骨・角・牙などを材料にして製作した各種の骨角器の類も非常に多く発掘され、これらの骨角器の中には、現在いくら考えてもどんな用途に使われたか全くわからないものもかなりあり、考古学者がこのような用途に使われたものだろうと推定したものにも、その推定と全く異った用途に使われていたものがないとは言い得ぬ現状である。またアカガイ、ベンケイガイのような2枚貝の背の中心を割って穴をあけ磨き上げた腕輪、カサガイなどの殻の中央に穴をあけた首から紐に通してかけたと思われる垂飾具、粘土を1握大につづみ形につくって素焼にして酸化鉄などの朱色の塗料を塗った美しい耳飾の類など、古代人の製作した種々多様な遺物が発掘されている。この貝塚で腐ってしまい、現在姿を残さないものには植物の繊維、毛皮、鮭の皮などの魚皮でつくられたと思われる衣類、袋物類、はきものなど、又木の皮竹などで作られたざる、かご類、その他木竹で作られた各種の植物製品があったことが考えられる。

貝塚は大昔の海岸近くに住んだ人々が、その海岸で採った貝を食べたあとの貝殻や、海でとれた魚を食べたあとの魚の骨、鹿や猪などの肉を煮たり焼いたりして食べたあとの骨などの残りものなど、不用になったものを捨てた場所であり、海岸近くに住んでいたために、貝を沢山食べてその貝殻をたくさん捨てたので、貝殻が層をなして堆積したのであり、その中には一緒に捨てたこわれた土器の破片、食料にしたけもの、魚、鳥などの骨も含まれている大昔のごみためだと小学校や中学校、高等学校の教科書でならわれたことと思うが、ごみために何故こわれぬ完全な土器や、美しいヘアーピン、鹿の角で苦心して作った釣針、銚などの全く破損していないものを捨てたものであろうか、稀に発見されるのであれば誤ってごみために落していったものとも考えられるが、余りにも多くわざと貝塚においていったものとしか考えられず、貝塚は今の人が考えるようにただのごみだめではないのはいかとの疑問を持った方もあると考える。

未開人の者の考え方には私達の一寸考えもつかないような、自然の力に対する信仰と恐怖がありま

す。現在北海道に住むアイヌがこれに似た信仰を持っていて、自分達の食料になった植物、魚、獣などはすべて天の神様のめぐみであり、食べたものの残りは一定の場所におまつりした。そのたましいを早く天の神様のもとに送りかえし、天の神様からなお多くの恩恵が受けられるようにお祈りし、海幸山幸を常に豊富にとることができ、農業を知らなかった彼等が、いつも食料飢饉におそわれることを願ったのであり、豊漁を祈るためには天に帰る食料となった魚や貝の魂のために大切な鹿角製の釣針、鉾などを美しいヘアービンなどと共に供えたこともあったであろうし、土器の中に彼等の最上のごちそうを入れて供えたことも想像され、大洞貝塚から沢山発掘されている土びん型の完形土器の中には木の実酒などをに入れて供えたこともあったであろうと考えられる。貝塚はこのようにいろいろのものの残骸をお祭りして、その魂を天の神様の許に送り帰す祭場であり、今のごみためとは大変その考え方が違っていたので、貝塚の貝の層の中へ、当時死んで行った兄弟、愛児などを手厚く葬り、その魂が貝や魚、獣などの魂と共に、早く天上の神様の許に行くよう祈ったものと思われる。まだこれで貝塚の謎が完全に解けたとは思われないが、この文章を読まれた人は、貝塚が今のごみためと違うものであり、ごみためであると共に、お祭りの場所であったと云う事を理解されたことと思う。

大洞貝塚の貝層に堆積している貝にはどんな種類のものがあるかと云うと貝塚に堆積する貝殻の半数以上、70%ぐらいの量をしめるのは幅5㎝内外のアサリであり、近くにある縄文文化前期末から中期の土器を出土する清水貝塚でも、又猪川町長谷堂にある中期後半の土器を出土する貝塚でも晩期末の貝塚でもアサリが多い事実は、この大船渡湾の東側の入江の遠浅な海には、縄文文化前期末から晩期末の数千年に亘る長い期間、アサリが繁殖し、縄文文化人の絶好の食料になっていたことをうかがうことが出来る。

この外に腹足類(2枚貝)としてはオニアサリ、ウチムラサキ、オウノガイ、アカザラガイ、ホタテガイ、エゾギンチャク、シラトリモドキ、アカガイ、サルボウ、ベンケイガイ、マガキ、ホッキガイ、カガミガイ、ミルクイ、マテガイ、イガイなど、計16種の貝殻が見出され、斧足類(巻貝)では、ウミニナ、アカニシ、エゾタマガイ、ツメタガイ、エゾボラ、スガイ、レイシ、イボニシ、アラムシロ、インタダミ、カサガイなど11種類の貝殻が見出されている。

以上記した貝殻の中で、現在大船渡湾内にはほとんどいないものもあり、考えて見る必要のあるものもある。径20㎝以上のホタテガイは今春の発掘でA地区の第1トレンチの2区、3区あたりの大洞BC式の土器片を出土する貝層からかなりの量発掘された。A地区の第2トレンチの下部貝層の後期末の土器を出土する貝層にはホタテガイの大きなものはほとんどなかったようであり、第1トレンチの5区、6区、7区などの大洞C₁式、C₂式の土器を出土する貝層にも少かったように記憶する。又ホタテガイは清水貝塚からは20㎝以上の大きなものが発見されている。縄文文化晩期の大洞BC式土器が使われていた時代は今から凡そ2500年前後の大昔のことと考えられるが、其後大船渡湾内のホタテガイが何時頃如何なる現象で激減したものであったろうか、又深い海底に棲むホタテガイを当時の人々ももぐって取ったものか、どうして取ったのであろうか、貝塚には干潮時にも水深4米以上の海底に棲む貝類が、かならず数種類あり、これらの貝類がどのようにしてとられたかは今後の研究によって解決できるかと思われる。幅12㎝以上に及ぶ大きなアカガイの殻もかなりの数見出された。これも同じような海底に棲むものである。縄文文化人も現代人が好んで食べるような貝類は、や

は好みで食べたようであり、まずいものは余程の食料飢饉の時でなければ食べなかったようである。

以上に記した貝類は今春の発掘調査で見出した貝類で、長谷部博士の前記の報告を見るとこの外にイソシジミ、ナガニシ、ヒレガイ、バテイラなどの種名が記されている今春A'地区、A地区にて発掘の遺物は、まだ整理を完了していないので、貝類以外の鳥獣魚骨の種名は発掘時に記録したもののみにて整理が完了後、魚骨や鳥骨はなお専門家に調べてもらえば、なお多くの食料となった魚類鳥類の種名も判名すると考えるが、ここには発掘中判ったものと、長谷部博士の調査の折りに出土したもののみを記しておく。

最も多く見出されたものはマグロ、ブリ、カツオなどの背骨であり、ついでマダイ、スズキなどが多く、他にクロダイ、フグ、サメ、アカエイ、トビエイなどの魚骨が見出されている。又海棲哺乳動物の骨カクとしては、イルカとクジラの骨が見出され、特にイルカの背骨顎骨などはかなりの量出土しており、マグロ、ブリ、カツオなどの大形の魚類や、イルカなどは当時どのような漁獲法によってとったものであるか、興味ある問題である。獣骨、彼等の好物はイノシシの肉とシカの肉である。日本中の何処の貝塚を発掘しても先ずシカの骨とイノシシの骨が目につき、又何処の貝塚でも最も多量に出土するのは、イノシシとシカの骨である。そして彼等はこの最も大切な食料資源であるこれらの動物は共同して保護していたのである。従って数千年の長い縄文文化の時代に、あれほど多数のシカ、イノシシをとっても減少することなく、縄文文化の時代の終末から弥生文化の時代まで大切な食料資源となったのである。

貝塚を発掘していると鹿の頭はかなりの量出土する。筆者も日本各地の貝塚や洞窟遺跡で数を記憶しないほど多量の鹿の頭を発掘しているが、頭に角のない頭骨は1つも発掘したことがない。即ち縄文文化人は牡鹿のみを狩猟の対象とし、食料としたのである。牝鹿は子を生み、大切な食料資源を増加するものとして、とることをお互に禁止したものと思われる。又若い牡鹿はとられているが、決して幼獣をとらなかったことも、資源保護のためであつたろう。

イノシシの牡、牝は鹿の如く角のあるなしで遠くから外見しただけでは一寸判別困難である。そのため猪は牝も牡の3分の1以上の量とらえているが、牡に比較すると少い。猪は下顎の牙などで容易に牡牝の判別がつけられる。

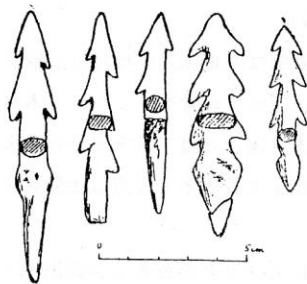
大洞貝塚から発掘された鹿は、今奈良へ行くと見られたニボンジカの骨も僅か発見されているが、多くはニボンジカよりも体格もひとまわり大きい角の立派なエゾジカが多い。鹿、猪以外の獣骨は猿、穴熊、タヌキ、兎などのものが発掘されている。又番犬、猟犬として飼育していた日本犬の骨はA'地区の第1トレンチ4区で手厚く埋葬してあったものを1体分発掘した。

また鳥類の骨は発掘中に種名の判ったものは山鳥、カモ類のもののみであるが、其他に10種類ぐらいの種不明の鳥骨があり、整理後、専門の学者に判別を依頼したいと思っている。

以上で大洞貝塚の製作品と食料残骸などの出土遺物の紹介を終る。

3、大洞貝塚をのこした人々の漁業

大洞貝塚からは前記した如くマグロなどの大きな魚の骨が多量に出土し、そしてそれと共にアゲの
ある鹿角製の固定銚第2図、離れ銚第3図などの突き具としての漁具、釣用の鹿角製の釣針第4図、



(第二圖) 大洞貝塚A'地區出土の鹿角製の固定鉾

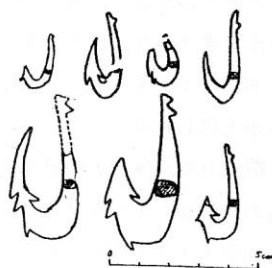
扁平な石の両端をわずかに打ちかいた漁網の錘にしたかと思われる石錘などが出土している。

日本の縄文式土器を出土する貝塚でアゲのある鹿角製の固定鉾を多く出土する貝塚は、東日本の太平洋に面する外海に直面するが、外海に近い貝塚で、西日本の例としては愛知県の吉胡貝塚（縄文文化後期-晩期）などから出土したものが数例知られる程度である。

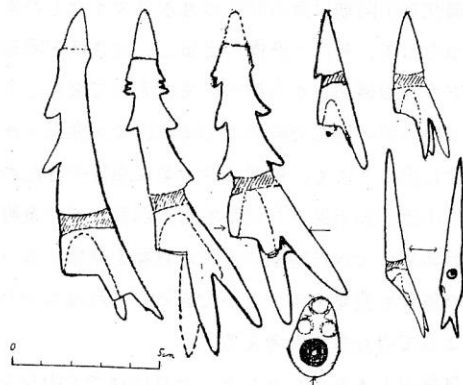
関東地方では横浜市金沢区称名寺貝塚（後期初頭の堀之内式土器を出土する貝塚）や晩期の土器を出土する千葉県銚子市松岸、余山貝塚などからアゲのある固定鉾がかなり

の数発見されており、このほか東京都太田区田園調布二丁目下沼辺貝塚（後期末）茨城県稲敷郡江戸崎町椎塚貝塚（後期が曾利B式）などからも、わずか1、2本ではあるが発見されている。また鹿角製の離れ鉾は余山貝塚から発見されている。

奥羽地方に入ると福島県磐城市小名浜町寺脇貝塚、同県相馬郡小川村三貫地貝塚、同村新地貝塚、宮城県桃生郡鳴瀬町宮戸島里浜貝塚、石巻市沼津貝塚、陸前高田市小友町瀬沢貝塚、同市広田町中沢浜貝塚、岩手県気仙郡綾里村宮野貝塚、宮古市楯が崎町貝塚などの縄文文化後期末から晩期の土器を出土する貝塚からは鹿角製のアゲある固定鉾をはじめ、離れ鉾、釣針などの骨角製の多種類の漁具が出土している。しかし外洋に面したマグロ、ブリ、カツオなどの外洋性の魚類の骨を多く出土する。そして鹿角製のアゲのある鉾、離れ鉾、釣針などを多く出土する貝塚は前記した奥羽地方太平洋岸の諸貝塚と、大船渡市にある大洞貝塚、下船渡貝塚、今は全く住宅地となり壊滅してしまった末崎町細浦貝塚ぐらいであり、縄文文化晩期の外洋性の漁業を研究する上には、これらの貝塚の出土品は貴重な



(第四圖) 大洞貝塚A'地區出土の鹿角製釣針



(第三圖) 大洞貝塚A'地區出土の鹿角製離れ鉾

研究資料であり、漁具と魚骨を対象して、現在の各地域にのこる古い漁法を参考にして研究を進めてゆけば、これらの鹿角製の固定鉾、離れ鉾、釣針などがどのような魚をとるためにどのような用法で使われたかも次第に明らかになってくるとと思われる。

縄文文化前期末から中期の土器を出土する赤崎町清水貝塚からもマグロの背骨は多数出土しており

そのほかマダイ、スズキ、エイ、サメなどの魚骨やイルカの骨も発見されているが、釣針、銚などと
思われる骨角製の漁具は今日までの調査では1つも出土していない。

又1954年(昭和29年)夏調査した陸前高田市小友町門前貝塚は中期末乃至は後期初頭の土器
を出土する貝塚で、魚骨はマグロ、マダイ、スズキなどが見られ、イルカの骨もあったが、本貝塚で
もアゲのある固定銚や、離れ銚は1本も出土しなかった。しかし本貝塚からは工具と思われる多くの
種類の骨角器と共に、内又鉤は外鉤のある精巧な鹿角製釣針が破片まで数えると5点以上発見されて
いる。

千葉県館山市那古稻原貝塚、横須賀市夏島貝塚など早期の貝塚にもマグロの背骨を多数出土する貝
塚がある。これらの貝塚からも骨製釣針は発掘されているが、銚の類は見当らない。しかし稲原貝塚
ではイルカの骨に黒ヨウ石を粗雑に打ちかいて作った銚が突き刺ったものが発掘されている。

アゲのある鹿角製の固定銚は関東地方では横浜市称名寺貝塚の出土例もある如く後期の初頭にはそ
の存在が明らかであるが、奥羽地方では後期中葉以後に現れたのではないと思われる。鹿角製の
離れ銚は後期末になってあらわれたもののようである。

この離れ銚こそマグロやイルカなどの大魚や海獣を追う当時の新式の漁具ではなかったであろうか。
このような漁具が縄文文化後期末に東日本で独自に発生したものか、周辺のいずれかの地から新しい
技術とその漁具としての伝播してきたものか、否かは今後の調査研究をまたねば解決し得ぬ問題であ
る。

第4図に示した如く鹿角製釣針も大きささまざまなものがあり、漁獲する魚によって釣針や餌を変え
ることは既にあったものと思われる。当時の漁法に釣と網と銚、投げ銚のあったことは大洞貝塚の出
土遺物を見ても理解することが出来るが、どのような網があり、釣にしても延縄の如きものまでであ
ったかどうかなどについてはまだ全く見当がついておらず、今後の調査研究に期待するところが多い。

最近縄文文化前期以降の時代の丸木舟カイなどの水上運航具は各地で発掘されており、丸木舟を数
隻横につらねて、外洋へ漁撈に出ることはさほど困難を感じなかったと思われるし、現在と異ってマ
グロなども大船渡湾口から湾内にまで入って来たことも屢々であったと考えられ、このような場合は
丸木舟で奥へ追い込んで湾岸の部落総出で大漁祝ったようなこともあったであろうし、とにかく今の
ように沖に出なくても、数哩の沖で楽に漁獲できたのではなかろうかと思われる。

北上川中流、岩手県と宮城県境附近西磐井郡花泉町(旧油島村)蝦島貝取貝塚などの伊豆沼などの
ある沼沢地帯にできた晩期の淡水産貝塚を発掘すると、その中に海の貝殻をいくつか発見でき、マア
ジなどの魚骨も発見することができる。これはおそらくは大船渡方面の人々との間に交渉があって、
交易によって得た食料と考える。

大洞貝塚の人々もたくさんとった貝はゆでて中身を出して蔭干にして干物とし、マグロなどの魚肉
も生身の切身をある程度の距離の部落までは運んだこともあったと思われるが、多くの場合は塩漬に
したり、燻製にしたり、干物にしたり長く貯蔵できるようにして、魚肉を得られない奥地の部落へ運
ばれたのではないかと想像される。又奥地からは石器の原材や山幸がこの海岸の村へ運ばれてきたも
のと思われる。

またこの当時の漁撈は村の経験をつんだ長老が指揮者となり、集団的な一致協力した現代に近い漁

業を行うようになってきたものと推察される。

む す び

以上大洞貝塚が日本の考古学研究上に重要な役割を果たして来た貝塚であり、大船渡市内に数ある縄文文化の遺跡の中でも最も大切に保存すべき貝塚であることを市民の皆さんに理解していただくために、今日までに諸先生の調査された経過を略説し、大洞貝塚よりの出土遺物を紹介し、また貝塚はただのごみためとは異なるものであることを記し、また最後に縄文文化の漁具の変遷を考え、大洞貝塚のつくられた時代には、どのような漁法があったかを想定してみた次第である。

思うままに書きつけたこの稿が読者諸君に多少なりと参考になる点があれば幸いと思うものである。この稿について、或は大洞貝塚のこと、考古学上のことで御質問のある方は左記へおたより下さればお答えします。

東京都港区芝白金台町

慶応義塾藤山工業図書館内

慶応義塾大学文学部考古学研究室分室

江 坂 輝 彌

社教シリーズ

- | | | |
|-----|--------|------------------|
| 第1集 | 南原 繁 | 世界は日本に何を求むるか |
| 第2集 | 佐藤 文治 | 気仙地方のことば |
| 第3集 | 及川 忠次 | 大船渡市の気候はどうなっているか |
| 第4集 | 金野 静一 | 気仙地方の俚諺 |
| 第5集 | 山田 彌太郎 | 気仙地方の地質 |
| 第6集 | 東 登 | 気仙地方先史時代の遺跡 |
| 第7集 | 江坂 輝彌 | 大洞貝塚 |
| 第8集 | 千葉 金作 | 気仙地方の動植物(予定) |

江坂 輝 彌

- 大正8年12月、東京都に生る
- 慶応義塾大学文学部史学科卒業
- 住所 東京都世田谷区経堂町593
- 主なる著書研究
加茂遺跡 (三田史学界)
大湯町環状列石ー(文化財保護委員会)
考古学講座「縄文文化東北編」
特に東北方面を重点として研究されており、考古学部門の最も
重要な縄文編年委員であり、今後先生の研究により編年細分
され、より一層科学的に究明されて、吾々の郷土史に光彩をそ
えるものと思う。

大洞貝塚 (非売品)

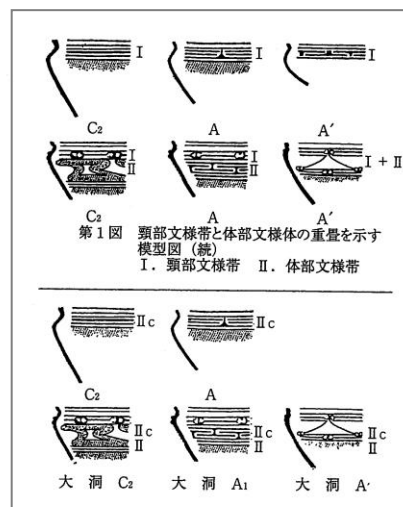
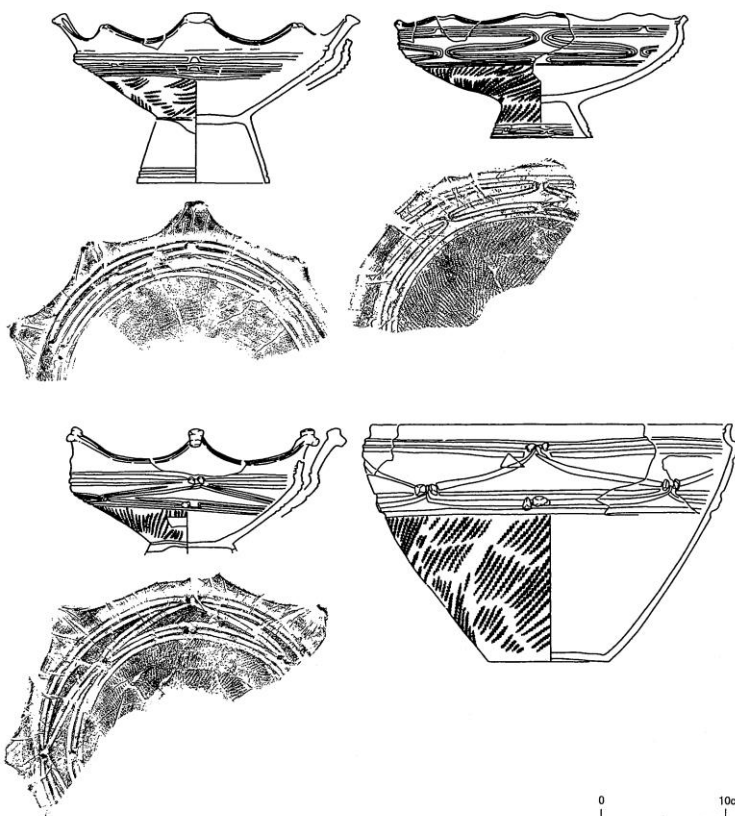
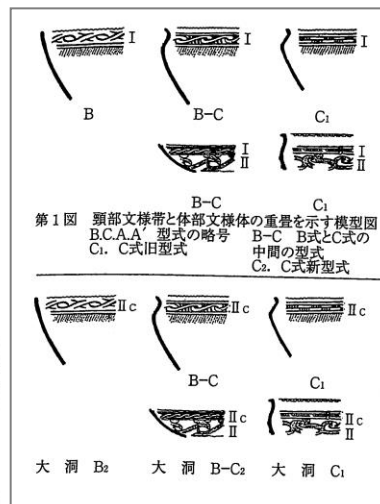
昭和31年 6月30日 初版発行
昭和50年 3月31日 再版発行
昭和54年11月10日 第2刷発行

著者 江坂 輝 彌

発行者 大船渡市教育委員会教育課

印刷所 (有) 共 和 印 刷

発行所 大船渡市教育委員会



大船渡市大洞貝塚 大正 14 年(1925)調査(長谷部言人・山内清男)出土土器
 (東京大学総合研究博物館所蔵)【上: B 地点, 下: A' 地点】(須藤 1992・2007, 高瀬 2004 を再構成)

Oohora 1956

